

## 幸せコアラ

「おや、こんなことが始まったんだ。」

夕食が終わって新聞を読んでいた父が声を出した。

「この市では、『ネット相談窓口』が開設されることになったそうだ。携帯電話を利用した覚えがないのに多額の請求が届いた。チェーンメールの処理に困っている。ふざけて知らないサイトにアクセスしたらメールがたくさん来た。こうしたことでなやんでいる人は利用してほしいとうったえているよ。本当に困った問題が起きているね。直香も夏希も大丈夫かな。」

「わたしたちは、そんなことしていないから大丈夫よ。ねえ、夏希。」

「うん……。」

中学三年生の姉の直香の声かけに、夏希は一瞬とまどいながらうなずいた。

「さあ、りんごをむいたから、みんなでいただきましょう。」

母がお皿をテーブルに置いた。

「わたし……後で食べる。宿題がまだ終わっていないから。」

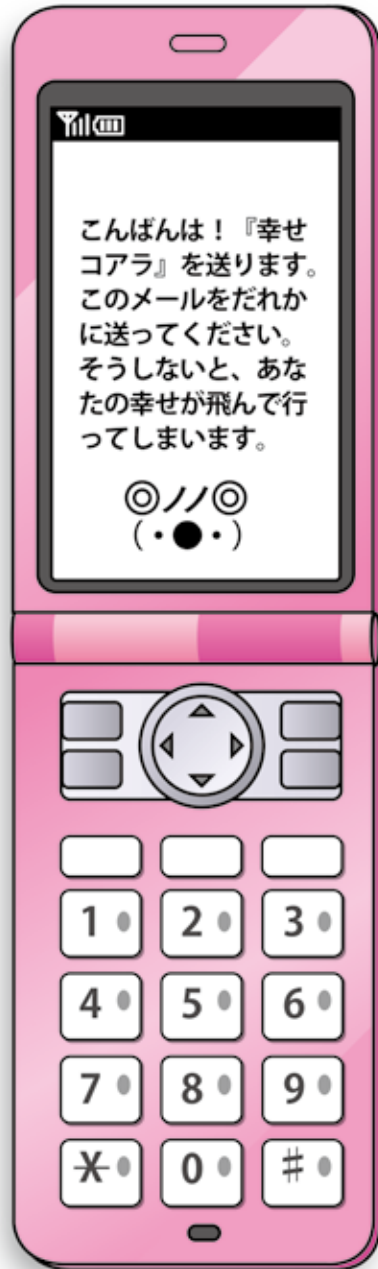
夏希は食卓をはなれて二階の自分の部屋に向かった。

「どうしよう……。」

机の前に座った夏希はつぶやいた。

※ ※ ※

一週間前の夜のことである。夏希の携帯電話にあるメールが届いた。



送ったのは友達ともだちの瑞葉みずはであることは送信者の名前なまえで分かった。

最近、六年生の夏希のクラスでも携帯電話を持つ子が増えている。緊急時に連絡が取れるから、習

い事が終わったときに帰宅時間を教えられるから、などといった理由で親が持たせる場合がある。もちろん親にねだって買ってもらった子もいる。

夏希と直香の場合は、共働きの両親が地震や事故などのときにすぐに家族で連絡ができるようになるためにあたえられていた。

「学校には持っていないから」、「メールは家族と友達以外にしない」、「友達とのメールは本当に必要な場合だけにする」、「知らないサイトにアクセスしない」、こうした約束を守っていた。

夏希のクラスは、女子の仲がすごくいい。グループに分かれているが対立などはしていない。そのことは担任の先生も自慢している。携帯電話を持っている女子はそれぞれアドレスを交換し合っている。

「幸せコアラ」は、記号をたくみに配置してつくったコアラの顔だった。夏希はその顔を見たとき思わず「かわいい。」とさげんでしまった。こんなことができるんだ、だれが最初に作ったんだろう、と感心もした。でも、そこに書かれていた「あなたの幸せが飛んでいってしまいます。」が気になった。だから、その日、ほかの人に送ることはしなかった。

翌朝、教室に入った夏希は瑞葉にどうして自分に送ったのかをたずねた。

「わたしのところには真紀ちゃんから送られてきたのよ。あれすごくかわいいでしょ。だからすぐに

夏希に教えてあげようと思って。」

「だれかに回さないで幸せが飛んでいくって書いてあったよ。」

「そうだったかな。ぜんぜん気にしなかったな。」

瑞葉はコアラのかわいさを言うばかりで、自分が送ったことを少しも後悔こうかいしている様子はなかった。

夏希は「幸せコアラ」をそのままにしようと思った。でも、思い切って消すことはできなかった。

それから二日後の夕方、田舎いなかにいる父方の祖父そふから夏希の家に電話が入った。祖母そぼが交通事故にあったというのだ。電話をとった夏希はすぐに父の携帯電話にそのことを知らせた。折り返し、辛い命にかかわるけがではなく、しばらく入院することになったが安心するようにと父は告げてきた。もうすぐおとずれる冬休みに、田舎に行って正月を過すごすことを楽しみにしていた夏希にとっては、つらい出来事だった。夏希は祖母が大好きだった。

電話を終えたとき、夏希はとっさにメールのことを思いうかべた。携帯電話を開けてみた。メール受信ボタンをおすと、残のこされている「幸せコアラ」が出た。そしてそえられている言葉「だれかに送ってください。」の文字が目に入ってきた。その文字の印象は今までと違った感じがした。見たくはないと思っても、すぐに何度も読んでしまうのだ。

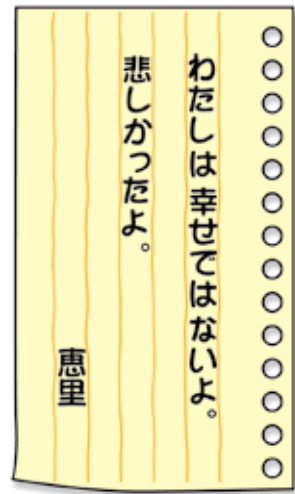
家にはだれもいなかった。母は仕事で帰って来ない。姉もまだ学校からもどっていない。父は安心しなさいと言った。しかし、祖母のけがのことが気になって仕方がなかった。それに、このままでは祖母の回復かいふくを自分がおくらせてしまうような気もしてきた。

夏希は携帯電話を何度も開けたり閉じたりした。

何分経たったか分からない。ひよっとしたら数十分過すぎていたかもしれない。夏希の指は送信ボタンをおしていた。

送り先は幼おきななじみの恵里えり。親友だ。夏希と瑞葉、恵里はいつも一いっしょ緒に行動している。恵里はどちらかといえど目立つ方ではなく、話も三人の中では聞き役に回ることが多い。六年生になってまた同じクラスになった。(恵里ならわたしの気持ちをつかってくれる。わたしよりしっかりしているし、こんなメールが来ても気にしないかも。) 夏希は自分にそう言い聞かせた。

あれから数日。毎日、恵里と顔を合わせている。三人で話もしている。しかし、これまでとはどこかちがって、恵里の口数はさらに少なくなったように思う。そして今日、下校途中とちゅうの別れぎわに、瑞葉に気付かれないように恵里はメモを夏希にわたしてきた。家で開いてみると、そこには



とだけ書かれていた。

※ ※ ※

「ああ、どうしよう。」

夏希はまたつぶやいた。手には恵里のメモがにぎられていた。本だなには、今年行った遠足の写真がかざってある。お弁当べんとうと一緒に食べた三人がピースをして笑顔で写っている。

「卒業しても、ずっと仲良なかよしいようね。」

そんな会話が思い出される。

(なのになわたしは……。)

夏希は、くちびるを固く閉とじながらそっと写真から目をはなし、うつむいた。なみだがこぼれた。やがて、夏希は恵里のメモを手にしたまま静かに部屋を出て、父母のもとに向かった。

